

上演2 2026年7月30日（木）2校目 東北ブロック（山形県） 山形県立山形東高等学校 『ぼいす／のいず』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 北海道苫小牧南高等学校 芦田 恵
---	---

高校デビューを目指して進学した麻美は、厨二病時代を知る同級生ばかりの高校に進んだ為にデビューしようにも上手くいかない日々を過ごす。3年生になってもなかなか友達ができない彼女を見かねた両親はワイヤレスイヤフォンをプレゼントする。しかし、箱の中に入っていたのは「おじさん」だった。彼はインパクトが非常に強いが、不思議で面白いだけの存在ではなく、麻美に寄り添う良き理解者でもあった。

どこか懐かしさを感じさせる舞台装置やそこに暮らす人々の人情は麻美や我々を温かい気持ちにさせてくれる。だが、麻美にとっては過去や現在を知り尽くされている環境だからこそ、変われずにいるもどかしさもあるのではないかと感じた。

特に印象に残ったのは、他の人は何気ない会話をしているだけなのに麻美にとっては、それが大きなノイズに聞こえていた場面だ。そんな時におじさんが彼女の耳を塞いでくれる。それは物理的にはただのノイズキャンセリング機能であっただけなのかもしれないが、周りの音を意図的に遮断されたことで彼女が救われたような気がした。スポットライトの狭い空間には2人だけ。なのに、彼女が孤独から解放されたように見えてとてつもない安心感を覚えた。

また、劇中では中島みゆきの「ファイト！」が度々流れる。最初は空回りしてしまう彼女の悲壮感を煽るように聞こえていたが、2回目はまるでエールを送るように力強く背中を押してくれていたように聞こえ、同じ音楽でも受け取り方が全く違った。

講評委員の中で多く話題に上がったのは、「言葉で話すだけがコミュニケーションではない」という意見だ。誰かにとってはただの「ぼいす」でも誰かにとっては「のいず」になることもある。だからこそ、必ずしも自分を助けてくれるのは言葉だけとは限らない。手を繋いだりハグをしたりといった身体的なコミュニケーションが救いになる時だってある。人と話すのが上手く行かなくても悩む必要はないんだと思わせてくれたような気がして心がぽかぽかと温かくなった。

作中で麻美の友達となったのは同級生の誠人だ。クラシック音楽を通じて放課後に語り合う関係になっていた2人は些細な行き違いから疎遠になってしまう。そんな2人が再び心を通わせるラストシーンでは、17時のチャイムから重厚なクラシックの音が重なり、互いの情熱的な合奏のマイムで幕が降りる。音楽しか友達がいなかった麻美が音楽を通じて他人と仲良くなっていく。音楽が人と人を繋いでいく様子に心を打たれた講評委員も多かった。



「ぼいす／のいず」というタイトルのスラッシュにはイヤホンによって音楽を流したりノイズを断ち切る様子が表されているように見えた。そして、プログラムに書かれたゲーテの言葉はまさにこの劇を象徴している。私たちは「孤独」と言われると静寂の中に1人ぽつんという姿を想像するが、本当の孤独とは大勢の人がいる中で自分だけが1人でいることだと、この劇を見て痛感した。今、実際に孤独を感じている人や、人との関わりが苦手な人にはぜひ一度見てほしい作品だ。